

重要貝類毒化対策事業 (要 旨)

勢村 均・北沢博夫・村山達朗

1. 毒化モニタリング調査

- 1) 毒化モニタリング4定点、プランクトン連続観察点2定点で調査を行なった。
- 2) 水温は例年とほぼ同様な季節変化を示した。
- 3) イタヤガイに5月24日から6月6日にかけて下痢性貝毒が発現し、毒量は0.05～0.2MU/g(可食部)であった。また、ムラサキガイには4月26日、6月6日、昭和61年3月27日に下痢性貝毒が発現し、毒量は0.05～0.2MU/gであった。毒量は島根半島側より隠岐島側で若干高く、期間も長期であった。
- 4) マヒ性貝毒は発現しなかった。
- 5) Dinophysis fortii 出現細胞数の増減と貝毒量の増減とはほぼ一致した。
- 6) 連続観察では、St.5(恵曇)で例年より高水温側に出現盛期が片寄り、St.5、St.6(別府)の間でも出現水温、時期が相違した。
- 7) 本県で発現する下痢性貝毒の原因はD. fortiiであり、D. fortii細胞は他海域から本県沿岸に移送されたと考えられた。
- 8) D. fortii出現期間および細胞数と毒量との関係にはある程度関連があることが示唆された(但し連続観察分について)。

2. 広域分布調査

- 1) 海況は昭和58年とほぼ同様であった。
- 2) D. fortiiの水平分布型は、例年と異なり、中央部定点に多く分布した。
- 3) D. fortiiの垂直分布は主として深度10mから30m層に多く出現した。
- 4) D. fortiiの形態測定の結果、今年は昨年まで沖合域にみられた大型細胞が全域に出現した。

(詳細は「昭和60年度 重要貝類毒化対策事業報告書(毒化モニタリングおよび広域分布調査)」島根県を参照のこと。)